維摩經義疏の研究

中島覺亮

一

法隆寺金堂釋迦佛後光の銘によりて數ふれば、本年は聖德太子薨去の推古三十年壬午から宛も一千三百年に相當するので、太子に關する事がらが諸方面に於て研究されると聞く。そこで今私共は、佛の經典を日本に於て始めて註釋を施され日本佛敎の權威たる太子の三經義疏に就て、聊か管窺した處を述ぶることゝなりたが、もとより私としてはその研究に杜撰極りもないので、甚だ慚愧にたえない。

私は今聖德太子の維摩經義疏に就て述べて見やうと思ふのであるが、その前に些か太子の三經義疏に就て一言して見やう。太子が三經義疏を著されたといふことは、平氏傳に記された處に就て見れば、

一、勝鬘經義疏は、推古天皇卽位十七年己巳四月八日（三十六歲）の起筆で、その翌々年同十九年辛未

正月二十五日(三十八歳)の擱筆である。(年齢は敏達三年誕生説を取る)

二、維摩經義疏は、その翌年推古帝二十年壬申正月十五日(三十九歳)の起筆で、その翌年同二十一年癸酉九月十五日(四十歳)の擱筆である。

三、法華經義疏は、またその翌年の同二十二年甲戌正月八日(四十一歳)の起筆で、その翌年同二十三年乙亥四月十五日(四十二歳)に功を終られたことゝなりて居る。

凝然大德の維摩經義疏菴羅記一の撰號下にも此の通り記されてある。然るに之れには異説がありて、顯眞得業の古今目錄鈔の第三條には御年齡の取り方は違ふが、勝鬘法華の二疏の起筆年代は前述と同じことである。然るに維摩經義疏の起筆のみは法華疏起筆より三年後の起筆となりてあるが、これは何か根據のあることか、今は何れが眞説とも判斷しかねるので、一説として出して置く、又同師の私記上(佛全九二頁)には、法華經には前疏五卷後疏四卷とあり、勝鬘經にも初度略疏後度廣疏各一卷づゝある旨記されてある。これは平氏傳の推古帝十四年の條に、天皇の勅によりて勝鬘法華の二經に於て太子が略して其疏を製作されたことが出て居る。果して此の事がありとすれば、法華と勝鬘とには各兩疏があることゝなる、而して法華の五卷の前疏が此朝になしと記したのは、太子が夢殿入定の時、隋の衡山へ齎らされた(平氏傳推古十七年の條)といふに符合せしめたものであらう。更に維摩經疏は只一度の作と記し、又維摩勝鬘二經正本無之と記してあるより見れば、太

子の三經疏の中、御眞筆本としては、勝鬘維摩の二經は古くより亡失して、殘る處は唯法華經の後疏のみ存在して居たものと見ゆる。さればこそ聖譽の鈔上(佛全四五一頁)にも私勘云として、推古天皇卽位二十二年甲戌生年四十三歲(平氏傳の推算年齡)春正月八日始製法華疏次で亥夏四月十五日製了稱二上宮後疏一有二四卷一法隆寺寶藏御筆疏是也云々と現存の如く書かれてある。然れば法華經の後疏の外の御眞本は、皆散逸して居るといふのであつて見れば、溯りて太子に法華勝鬘の二經が兩度まで確に疏釋されたといふことは今判然とは知ることは能きぬ。尤も推古十四年には勝鬘も法華も太子の御講演があつたのであるから、その時御草案程のものゝ在つたといふことは當然であらう、而して開板は寶治元年十月初めて行はれて以來度々翻刻された。現に今坊間に流布されて居る三經義疏はその翻刻本が多いが、經疏としては完全な御著作であるからこれが前揭の年時の御製疏と見て、それに就て研究を進めるより外はない。

二

三經疏の中、法華勝鬘の兩疏には、撰號の處に此是大倭國上宮王私集非海彼本との語が副えてあるが、維摩の疏にはない。之を一說には法華勝鬘の二疏は、大隋國へ送られたから此語があるが、維摩疏は送られなかつたからないのであると言て居る。併しこれは凝然師の言はれたやうに、有無

々在隨意不定で、ありてもなくても同じ意として、三疏皆あると見るが可い。又唐の明空の書いた勝鬘經上宮疏の私鈔には、非海彼本者、是疏主註、或是別人註とありて、太子の御自註とも見え、又後人が置いた註とも見ゆると二說を出して居るが、これは太子の自註であらう。たとひ後人が置いたにしても、太子の意を能く探り汲んで記したものである。今思ふに、この語を卷初に掲げられたのは太子の大抱負でありて、今此の三經を疏釋するのは支那や朝鮮等の海の彼方の外國にも此の三經に於ける註釋書は頗る多いことであるが、彼等の本でもなく、また彼等の糟粕を嘗めてその眞似に書いたのでもない。日出る國卽我が大日本國の佛敎として、此の三經を註釋し此を以て日本佛敎の土臺を築くのであるとの御意と窺はれる。つら〳〵惟ふに、印度の佛敎は槪して小乘敎である。幾分その當時大乘敎はあるにしても、法相などの三乘權敎でありて、一切衆生を救ふ一乘敎はない。又支那朝鮮の佛敎は一乘敎が勝ちを占めて居るにしても、超世間的脫俗的でありて、一般民庶とは全く懸け離れて居る。そこで太子は我が日本は此の三經の意によりて、我が日本の佛敎は一般庶民と密着せしめ、佛敎を以て國の大本と定め國政を執らうとせられた。夫れが唯政略のためといふのではなく、自から此經に信を措き、身を以て率ひられたものである。十七憲法の篤敬三寶章の如きも、此の思召から根據が立ちて居ると思はれる。そこで今の三經に就て見るに、維摩經の主人公たる維摩居士は在俗の身でありながら、身躬ら佛法を體得して、多くの人を化導して居り、勝

鬘經の能說者たる勝鬘夫人は、在家の女子でありながら、やはり釋尊に歸嚮しつゝ、自國卽ち阿踰闍國內の七歲以上の女子を勸化し、その夫友稱王をして、七歲以上の男子を敎導せしめて居る、これ等は太子理想の人であつたであらう。太子は之に習ひ在俗の儘に自から三乘小乘ならざる一乘敎を體して、以て人を誘導するとの意より、法華經を選取された。卽ち我が日本國中の一般衆庶をして悉く一乘海に浴せしめ、一乘佛敎の上に生活せしめやう。是れが釋尊說法の本旨であると思召した。此の意味よりして、數多き佛敎中より、特に三經を選び取りて、註疏されたものであらう。太子一代の御行跡を窺へば、必ず此の意味はないとは思はれぬ。これも推古の女帝と太子とは勝鬘夫人と維摩居士とに私淑し居られた處より、帝は太子に命じて、此の三經に於て講讃せしめ註釋せしめられたに基因することゝ思はれる。此の如く太子が大日本國の佛法を海の彼方の漢鮮の佛法とは大に異りて、獨特に活かして、一乘の眞意を發揮せうと思召した處では、御自身旣に和國の敎主たる御自任がありたので、後に親鸞聖人が和國の敎主と崇められたのも、無道理な讃仰ではないと思はれる。これが非海彼本と標榜された御意趣と窺はれる。此に根基して、成立された三經義疏であるからこれには太子畢生の力を振はれたものである。そこで出來上りた處では、不偏不黨にして、支那の諸大家の註釋にも劣らぬ實に堂々たるものである。さればこそ間もなく太子の註疏が海の彼方にも渡りて、四明天台系に屬する唐朝法雲寺の明空は、太子の勝鬘經義疏の私鈔六卷を書いた位

である。又維摩經義疏に就ては、我國唯一の註釋家たる凝然大德は菴羅記四十卷を記されたが、惜むべきは後の十卷を缺いて居る。以てその所釋たる太子の疏が如何に甚深幽玄であるかゞ測られる。

三

太子の三經義疏の中、今正に維摩經義疏を研究せんとするに當りては、逆め先づ所釋の維摩經と居士の何ものたるやを一往知らねばならぬ。そこで先づ本經の成立から研究することゝした。

此の維摩經の佛の說時に就ては、天台家に傳ふる處では、佛祖統記三下（致八四十右）及び同三十四（同九四十八右）に、佛成道十六年としてある。これは小乘敎を彈訶して居る本經の說相から見込んだものである（菴羅記十三）。而して此の經の由來に就ては、天台の維摩經略疏二十右に、佛が方等部に屬すべき普集經を說かれて居た時、此の經に出て居る處の寶積といふ長者の子が佛所に來て、淨土のことを聽うとして、佛の說法を請ふたによりて、此の經初の佛國品の說法が始りたものと言ふてある。これも經の說相から見込んだもので、普集經には正報佛身の因果が說かれてあり、此の經には依報淨土の因果が說いてあるからのことで、彼の經は此の經がためには序分に當ると論定して居る。而も此の事は、昔光統律師法尙（左券一四十二右）が長耳三藏から聞いた說でありて、敢て怪むべき說ではないといふ意である。此の長耳三藏といふのは、耶連提耶舍三藏のことで傳は續僧傳二三左貞元

錄九（結六五十三左）等に出て居る。この長耳三藏の咄したことは、諸宗の註釋大家は何れも信用したもので、今その一例を出して見るなれば、諸經の初めの如是我聞の一句を、此の長耳三藏は三寶に約して解釋した。卽ち佛寶に就かば、三世の諸佛は是の如く同說されて居るから信ずべし。又法寶に就かば、法門の常恒なることは古今是の如く變らざる故信ずべし。又僧寶に就かば、阿難の傳聞が是の如く間違はないから信ずべしと解した　此の說を一乘家たる賢首（探玄記二六右）にも、淸凉（大疏鈔一上六右）も、今の天台も三乘家の慈恩（無垢稱贊一末二右）法華玄贊一三十八左）深密經疏一三十丁）もみな採用して居るので、その信用の程度が知られる。さて長耳の說は異存はないが、この經が佛成道第十六年の說法といふに就ては、此に疑問がある。卽ち經の弟子品を見れば、舍利弗等の十大弟子が佛から維摩問疾の使命を蒙りて、何れも皆昔し維摩に彈訶せられたことを述べて、辭謝して居る。處がその諸弟子の中の阿難の如きは、佛成道の夜生誕して成道二十年に出家した人であり、又阿那律も優婆離も阿難と同時の出家といはれて居る。斯く成道二十年出家の人々が成道十六年の會座に居ては勘定が合はぬ。而もその上何れもが我昔云々と訶せられたといふて居るが、羅睺羅の如きは、佛成道の夜生れて、九歲の時出家したと傳へられて居る。して見れば迚も五六年前のことで、昔などゝは申せぬ筈である。されば十六年說では此の本經の說に符合せぬではないかとの疑がある。そこで古來如來の化儀は自在にして時宜不定であるよりして、こんな例は澤山ある。例へば大愛道女が出家

を許され八敬戒を授かりて、初めて尼の佛弟子が出來たといふことは、成道十四年のことである。夫れが成道二十年出家の阿難の取り傚しによりたものとされてあるのと同例だ(菴羅記十三)と言ふのであるが、やはり疑問は解かれて居らぬ。こんなことからでもあらうか、嘉祥の淨名玄論七の別釋會處の下に、舊說二義を擧げて淨名是佛成道第三十年所說又云二十六年說也とある。併しこれでは佛祖統記主は肯んずる筈はない。彼れは天台に屬する人であるが、此の說は天台の五時說には合はぬ。天台は阿含十二年方等八年般若二十二年として、維摩經を方等部に入れて居るので、此の說では維摩經を般若部中に入れざるを得ぬことゝなるからである。他說は擱き、私は太子の意を窺ふて見たいと思ふ。太子にはもとより敎相判釋といふこともなく、此の經の說時を定められたこともないから、唯推究に過ぎぬことではあるが、先づ太子の法華經疏には、常に光宅寺法雲の說を本義として採用されてある。その光宅は頓、漸、不定の三敎を分ち、その漸敎中には、具に五時を開いて居る。此の五時說は、定林寺の柔法師も次法師も道場寺慧觀法師も取り(嘉祥疏一)、梁の三大法師中には光宅のみではない。開善寺の智藏法師も之を採用してゐて、古師の中には、有力な說である。その慧觀の五時敎といふのは、一に有相敎、これは佛成道十二年間所說の法有我無の阿含經である。二に無相敎、これは三十年間說法の卽空無相の般若經、三に抑揚敎、これは維摩思益等の抑小揚大の經、四に同歸敎、これは成道八年間所說の同歸一實の法華經、五に常住敎、これは最後に

說ける常住佛性の涅槃經といふのである（菴羅記六）。太子は此の說を採用されたものと窺はるゝ處は、疏上卷佛國品中の寶積の偈の三轉法輪於大千等の六行を釋して、初二行嘆三十二年中說二相教一次一行嘆三三十年中說二五時般若一也」とあるのがそれである。これから見るときは、太子は此の經の說時は慧觀の五時說を取て般若の後法華の前で佛成道四十二年頃とせられる意と窺はれる。太子が斯く見られた處で經文に矛盾もなく、極めて穩當な說と言はざるを得ぬ。尤も近頃の研究のやうに、大乘經の成立を佛滅後、六七世紀の後、大乘氣運勃興の時に在りとする時は、經中の矛盾など論ずるに足らぬことであらうけれども、縱し其の說が大乘非佛說とまでは言はぬにしても、あまりに經文を輕んじはせぬかと思はれるので、今私はその說には順ひ難ねる。

四

太子が疏釋せられた經本は、羅什の所譯であるが、此の經の價値を知るため、少く翻譯のことを述べて見やう。卽ち此經の翻譯には、後漢以來七譯あつた。略して列ねて見る。

一、古維摩經二卷、後漢沙門嚴佛調譯、初出、缺本、開元錄一（結四五左）

二、維摩詰經二卷、吳優婆塞支謙譯、第二出、一名二佛法普入道門三昧經一、黃武年間於二武昌一譯現存、開元錄一（結四九右）

三、維摩詰所說法門經一卷、西晉沙門竺法護譯、第四出、大安二年四月一日譯成、缺本、開元錄二（結四十四右）

四、異毘摩羅詰經三卷、西晉優婆塞竺叔蘭譯、第三出、元康六年譯成、缺本、開元錄二（結四十六右）

五、維摩詰經四卷、東晉沙門祇多蜜譯、第五出、缺本、開元錄三（結四二十四右）

六、維摩詰所說經三卷、姚秦沙門鳩摩羅什譯、第六出、一名不可思議解脫、弘始八年於二大寺一譯、僧肇筆授、僧叡序、現存、開元錄四（結四二十七右）

七、說無垢稱經六卷、唐沙門玄奘譯、第七出、永徽元年二月八日於二大慈恩寺翻經院一譯、八月一日畢、大乘光筆授、現存、開元錄八（結四六十一左）

以上の如く、此の經には七譯ありて、その中四本は缺け支謙譯、羅什譯、玄奘譯の三本だけ現在して居て、その三本は皆大藏中に攝められてある。又右所列は開元錄によりて出したが、貞元錄等全く同じことでありて、菴羅記も此の通り列ねてある。猶此の外に龍舒の大阿彌陀經のやうに、此の維摩經にも支敏度なる者が支謙譯と竺法護譯と竺叔蘭譯との一支兩竺の譯本の字句を修正して、合して一本としたものが五卷ありたが、これは開元錄も貞元錄もいふた通り別翻でないから、一譯として數ふることはならぬ。尤もその合經の本も今は缺本である。併し在りたに違ひないといふことは、出三藏記八（結一四十一左）にその合經の支敏度の自序が僧肇の序と僧叡の序と相並べて出してあ

るので知られる。この外に又江泌女といふ巫女が誦出したといふ僞經の經摩經もありたといふがこれも傳はらない。

さて現存の三本の中でも、玄奘の翻譯されたのは、太子の疏の成りて後三十八年目であり、薨去後二十九年目であるから、それを太子が見られる筈もないが、支謙譯は後漢の初め黄武年間であるから、太子製疏前約三百七八十年餘であり、羅什譯は弘始八年であるから、太子の製疏より二百年餘り前の譯であるによりて、此の兩譯は見られたものとして、その中にも羅什譯は支謙譯に比して其譯しぶりが精密であり、文章も極めて幽麗であるので、太子は此の羅什譯を採りて疏釋を施された。尤も太子のみではない。古今漢和の諸大家もみな此の羅什譯に就て註釋して居るのはその譯が好いからである。

五

此に一言すべきは、慈恩の說無垢稱經疏には、羅什の翻譯は訛謬が多いといふて、六卷本末に亘りて至る處に詈りてゐる。彼は新譯家玄奘門下の四哲の一人で、新譯に忠實なる餘り、舊譯に對しては常に味噌糞に言ふのである。それがたとひ太子薨去後に譯出された經を偏執して起りた論で太子には深い關係がないにもせよ、又太子の疏を直接罵倒したのでないにもせよ、太子が信用して義

疏まで著して採用された經本を味噌糞に言はれて見ると、その味噌糞が太子の德を穢すこと夥しい。そこで太子のために、此に一往辯疏せねばならぬ羽目となつたが、その謗難の全部を擧げて辯疏する暇はない。又其の多くをいふ必要もないので、今は唯一部を總標する題號と、各品の品名に就ての謗難に對する辯疏を試みて以て本文中に於ける諸難の辯疏をこれで代表せしめて置くことゝする。

慈恩の說無垢稱經疏一本三十三丁 叙經不同の處に曰ふやうは、(一)羅什は維摩詰所說經一名不可思議解脫といふたが、梵本を見るに阿費摩羅枳里底とある。此の阿摩羅は無垢であり、費は稱であり、枳里底は說である。梵語は衣着又は飯喫といふやうに、動詞が後になりて居るから、若唐言に譯すれば、說無垢稱で無ければならぬ。然るに羅什は田舍の龜茲から出て來たもので、漢文の法に暗い處から、動詞の說の字を後へ廻したと見ゆるけれども、此の說の字は佛說の說であるから、譯する時は上に置かねばならぬ。若し羅什のやうに、維摩詰所說とすれば、維摩の說法といふことになるが、もと〳〵經といへば佛の外には說くものはない。佛と佛弟子は明かに區別せねばならぬ。瑜伽論八十一十二丁 にもある通り、十二部經中で論議經だけは弟子の所說であるが、他の十一部は皆佛說で弟子は說くことはならぬ 又三藏の中では論藏だけは弟子も說くことを得ても、經と律との二藏は皆佛說である。よりてたとひ天魔外道の說くことはありても、それを佛が印可されたなればやは

り佛說となるので必ず印可がある。若し印可が無く唯弟子の說なれば經ではない。今維摩も自分に經を說く筈はないが、たとひ此の經中多く維摩が說いてゐても、佛の印可のある邊では皆これ佛說である。何して羅什の所譯のやうに維摩詰所說といへやう。(二)又その維摩詰所說といふが、梵語には當りかねる。單に維摩といへば、垢稱といふことにもならうが、それでは羅が缺けてゐる。又阿がないので、無の翻語が出ぬ。そこで單に維摩といふを淨名と翻するのは義には妨げなくとも、語の上には甚だ不都合である。又詰は枳里底で說の梵語である。その上に重ねてまた所說といへば、說が重言となるから可けない。(三)羅什譯には題號の處に一名不可思議解脫とあるが、これは梵本にはないことである。梵本には經の最後に佛言此經名爲說無垢稱不可思議自在神變解脫とありて人と法との二はあるが一名になりて居る。夫れを羅什が翻譯する時、二名に分けて經の首に揭げたのであらうが、こんなことをするならば、勝髮經には經の末に十五名あり、無量義經には十七名も出て居るから、何故夫れ等の經の翻譯の時に同じやうに初めに出さなかつたか、これも羅什は初めには一名不可思議解脫と細註のつもりで題下に記したのでもあらうが、これがため後世には之を大字に寫し出して、末々までも二の題號と見做して解釋するやうな誤謬の本を拵えた。本を探れば罪はやはり羅什にあると批難した。(四)又慈恩は一經十四品の品目に就ても、唐譯と異るものに就ては、一々非難した。(イ)第一羅什が佛國品と品名を附したのが氣に喰はぬ。序品と言はなくてはならぬ。羅

什は經の初品に、寶積が佛に問ふて、佛が嚴淨佛土のことを說かれたから、佛國品と名くるとの意でもあらうが、その佛國のことを說くのが後に維摩居士のことを說くための序事であるから、序品とせねばならぬ。若し羅什の如くいふなれば、法華の序品に七種成熟のことが出てゐるから、成熟品とでも言はねばなるまい。然るに汝は序品といふたではないか、此の經のみ何故序品と言はぬか、殊に諸經何れも皆序品があるに、此經だけない筈はあるまい。已に最後に囑累があるからは、初は序品で無けねばならぬ。(ロ)又羅什は第二品を方便品といふたが方便といへば大小乘に通じてあり、又大乘中にも權大乘實大乘にも通じてあるもので、甚だ紛らはしい。そこで今は小乘や權大乘の方便でないといふことを顯はして不思議方便といはねば意味が充分徹底せぬ。(ハ)又羅什は聲聞弟子を明す第三品を弟子品といふたが、單に弟子といへば菩薩にも通ずる語である。そこで聲聞品と言はねば判然せぬ。梵本を見ても弟子の言はない。(ニ)羅什は第五問疾品を文殊師利問疾品と名けたが問疾は必ずしも文殊一人ではない。そこで單に問疾品といへば可い。文殊の二字は不用である。(ホ)羅什は第七品を觀衆生品と名けた。然るに衆生といへば草木にも通ずる、有識の人を觀ずることを說いた處であるから、觀有情品といはねばならぬ。(ヘ)羅什は第八品を佛道品と名けたが、これは菩提分品と言はねばならぬ。菩提は覺の義で佛果であり、分は因の義で、佛果の因を明した一品であるからである。佛道といふも道を因道と見て、佛果を取る道と解すれば可いやうなものゝ、弟子

の僧肇の釋で見ればやはり虚寂玄妙の果道として居る。これが羅什の意であるから好くない。(ト)また羅什は第九品を入不二法門品と名けた。其の意は淨名の一默が入不二で、妙德等の發言したのは入二とするつもりであらうが、これは總じて不二の法門を明したものであるから、不二法門品と名くべきことである。(チ)羅什は第十品を香積品と名けたが、それでは香をたゞ積み重ねたことばかりになりて了ふ。然るに此の品に說く佛は、佛身の香體が高妙で香臺に比類せらるゝといふ處から、佛名としそれを品目としたのであるから、香臺品と名けねばならぬ。(リ)羅什は第十二品を見阿閦佛品と名けたが、夫れでは一品の宗旨に合はぬ。元來此の品は佛が維摩に對して如來を觀ずる相を問はれ、維摩がその觀じやうを述べたものである。又後に阿閦佛のことがありても、それは舍利弗の問によりて、佛が維摩は本國の阿閦佛國から來たことを說かれたに過ぎぬ。そこで見阿閦佛品では意味が通ぜぬ。依りて新譯の如く、觀如來品といはねばならぬ。

こんな調子で、慈恩は舊譯に對しては狹こましく一々垢を探して非難を加へてゐる。さり乍ら遇にはその難の當るもあれど、其多くは當りて居らぬ。たとひ當りて居ても、新舊二譯の見解の相違に過ぎぬ。今その相を述べて辯疏せやう。

(一)先づ初めの經題に就て慈恩は維摩居士の所說といふことではないと言て居るけれども、本文既に維摩の說いて居る處が大部分を占めて居る。何もそれを否むには及ばぬ。既に梵本に阿費摩羅枳里

と云ふその次第で見れば、維摩の所説といふことになるではないか。強て夫れを倒置して佛の能説とせねばならぬとはない。此の例は經題として少くはないが、近い處で取れば、勝鬘經の題號に勝鬘師子吼一乘大方便方廣經とある。勝鬘夫人の説法であるから、勝鬘師子吼と題したものであつて佛の外は決して説法はならぬといふ筈はない。智度論にいふ如く、經の説人には大途五種ありて華嚴經や大集經の中には菩薩も聲聞もさては天仙等の代説が最も多く出て居る。夫れ等も佛の印可さへあればその儘佛經である故に古來佛經として襲用して居る。強て説の字を倒置して佛の字に附け佛説と見ねばならぬとはない。維摩の説法の儘佛印可によりて佛經とするが却て允當である。

(二)維摩詰の名に就ても、字々句々の直譯ならば、一々配當せずばなるまいが、意譯なれば意味が通ぜば夫れで可い筈である。

(三)一名不可思議解脱とあるに就ても、能説の人より名れば維摩經であるが、所説の法門よりいはゞ不可思議解脱を説いた經であるから、此の題名を安いたもので、却て此の細註があるから一部の總標たる題號の義が顯れるではないか。是れ古來此の經の宗を判じて、不可思議解脱爲宗といふた處に適合するのである。若し梵本にその題名がないといふならば、梵本の經にはすべて首題がないと聞くからは、譯經には皆無題とせねばならぬことゝなるではないか。彼れは一を許して二を許さぬとは五十歩百歩の論ではないか、又品目に就ても、(イ)初品には淨佛國土を説いたから佛品と名くるに

何の妨はない。却て彼がいふ如く序品といふては妥當でない。何故なれば序は唯初品だけではなく太子の說で見ても初四品は皆維摩說法のための序說であるからである。(ロ)又彼れは第二品に於て小乘權大乘を簡ぶため不思議の言を置かねばならぬといふが。此の經は初めから實大乘の不思議を說いて居るから、そんな簡濫は無要である。(ハ)又第三品に就て彼は菩薩も弟子であるから、聲聞品とせねはならぬといふけれども、菩薩は必ずしも弟子に限らぬ。他方來の菩薩の如きは釋尊の弟子ではない、依て舊譯ではいつでも聲聞を弟子といひて別に菩薩を並べ擧げて居る。阿彌陀經に如是等諸大弟子並諸菩薩といふ如きがそれである。(ニ)又第五品に就て彼は問疾者は文殊ばかりではないといふが、此一品中には文殊の外に誰が問疾して居るか。文殊に從屬して居たものはありても、一言も發言して居ないではないか。(ホ)第七品に就て彼れは衆生は有情で無ければならぬといふが、これは舊譯新譯の常の語遣ひで此處ばかりの論ではない。併し衆多の生死を受くるより衆生と名くといふ邊では、衆生の名が草木に通ずるとは言はれぬ。(ヘ)第八品に就ても佛道といふのは菩薩は非道を行じつゞ直ちに佛道に通達するといふのであるから、必ずしも彼等權大乘家のやうに因果を隔歷して道を必ず因と見ずとも可い。(ト)第九品の名に就て入不二法門といふのも初めの諸菩薩の述ぶる處が二といふのではない。維摩の默を始め諸菩薩の述ぶる處がみな不二法門で、それに證入する入不二こそ經の本旨である。彼の言ふ如く唯不二を顯はすのみならば、此一品に明す處は戲論徒說となり

終るではないか。(チ)第十品の香積佛の名は香氣が十方の諸佛人天に勝るゝこと最第一なるより得た處であるから、彼がいふ如き香臺といふよりは香積の方が親しい。(リ)第十二品名の阿閦品の名は太子の疏にも言てある如く、若し文の上から見れば觀如來身品とでも言はれうが、今は大衆をして彼の國土を見せしむるといふ得益から名けたもので、敢て非難する程のことではない。猶此の外に諸處にいろ〳〵の非難を設けて居り、又夫れを通釋すべきであるが、今はすべて省略する。要するに慈恩の非難は何れも三乘局執の眼から見た上の來難でありて、經文を熟々見ればその難は當らぬものが多い。之によりて太子が採用された羅什所譯の經本には間然する處はないといふべきである。

六

次に太子の私淑された維摩居士その人に就いて、少しく研究して見やう。太子疏の意は方便品の初の釋によれば、維摩居士の一身が三階兩重に見られて居る。卽ち一は金粟如來、二は妙喜の上首、三は長者居士との三階で、それが兩重の本迹となる。その一重は本門は過去の金粟如來で、その迹門が八地以上の妙喜世界の大菩薩であり、又第二重は本門は妙喜の大菩薩でその迹門が此の土の維摩居士と見るのである(菴羅紀十一)。先づ第一にこの金粟如來といふのは、過去莊嚴刼の佛であるが、これを維摩居士の本地とすることは、三論系に屬する學者間には相傳の說と見へて、既に嘉祥

の淨名言論二の論二德位一門の下、及び淨名遊意二十四左にも出てゐる。併し此の本門金粟如來といふ說の源は玄論には發迹經云とあり、遊意には思惟三昧經云として出してあるけれども、實は何れが正しき出據であるか判然せぬ。太子もその當時高麗から來た佛學者の多くは三論系の人でありて、それ等の人の傳說に據られたものと思はれる。第二に妙喜世界の無動如來の上首であるといふことは、本經の阿閦佛品に出たことである。それを八地以上とされたのは、居士は生卽無生の空理卽ち一切法の本たる無住の眞理に體達して居らるゝといふ處から見たものである。それゆへ居士の得られた無生法忍を八地無生忍とせられたものである。太子三經疏に於て、維摩のみではなく、勝鬘夫人も之と同じ理によりて、八地以上の法雲の大菩薩と見られた。さて第三に此土應現の維摩に就て見れば、居士は經の方便品にある如く、毘耶離大城の長者でありて、純然たる在俗の身である。毘耶離は畏舍離とも維耶離とも書き、新譯では吠舍釐と綴りてある。大城とは毘耶離國の中の一城を指したものである。西域記七（致七三五右）によれば、此國は中印度の殑伽河の東北百四五十里に在る一國で、玄奘三藏渡天の頃、已に佛法衰頽して、露形などの外道が繁居して居たとある。その宮城西北五六里の處に伽藍あり、その傍に此の經を說法された菴羅樹園の跡に窣堵波もあるといひ、その伽藍の東北三四里の處に又　堵波がありて、維摩の居宅の基趾であると記してある。居士は常に此處に居て方便品にもある通り、在家生活をして妻子をも畜へ、眷屬をも養ひ、寶飾をも服し、飲

食にも飽き博奕戯處にも至り、異道世典をも明らめ、治生の俗利をも穫、街衢にも遊び、講論學堂にも行き、婬舍酒肆にも入り、長者居士にも交り、四姓の人々からさては大臣王子内官宮女庶民梵釋等とも往復して尊敬せられて居たのである。居士に妻女のありたことは月上女經（黄八二十右）に出でゝ妻を無垢と名付け、女兒を月上女といふ。此の月上女も常人ではない。月上女經に説く如く、彼女の名聲端正無比なるより、王公大臣長者居士婆羅門等の若者が婚嫁を求むるに乘じて、佛の援助のもとに彼等を濟度した人である。此の經不二法門品の三十一菩薩中の第二十八番月上菩薩とは此の月上女のことであらう。尤も月上女は女ではあるが、菩薩は敢て形體の男女には關はる處ではない。そのことは此經觀衆生品に天女と舍利弗との問答にても思ひ知られることである。又維摩居士に男子のあることは善思童子經（黄八初右）に出て居る。大方等頂王經（同八右）大乘頂王經（同八十四左）はその異譯である。卽ち居士の男兒は善思童子（又は善思惟童子）と名付けて、是れも常人ではない。幼少にして乳母（或は妻室）を驚かし、佛に偈を以て應答し、富樓那と問答し、無生忍を得た人である。これも此の經三十一菩薩中の第十三に善意菩薩とあるは此の人であらうと思はれる。猶ほ佛道品の偈に智度を父とし、方便を母とし、法喜を妻とし、慈悲を女とし、善心誠實を女とするなどのことも出て居るが、彼れは居士の精神上の家族をいふので、現實生活上のことゝは意味が違ふと思ふ。何れにもせよ、居士の一家は佛法海に浸りて居たものに違ひない。以上の如く維摩居士の

本迹を見れば、その間三面になりてあるが、其中初の二面は居士を崇仰するあまり、その德を覬覦して本門を探りたのであるから　之を第三毘耶離在俗の一身に收めて見ることを得る。此の時居士の體質が卽ち垢染を離れ高德を具へた人といふことゝなる。そこで此の淨名の名を、肇公は釋して法身大士也　權道無方　乃至和二光塵俗一因通二道敎一といひ、竺道生は晦二跡五欲一超然無レ染清名遐布故致二斯號一といひ（註維摩一左四）、淨影は法身體淨妙出二塵染一內德旣盈美響外彰といひ（義記一三左）、嘉祥は淨德內充嘉聲外滿天下籍甚と歎じてゐる（疏一太子初右）、太子は維摩に此の德あるより、常にあやかられたもので、已に疏の眞最初から居士の德を讃嘆して、維摩詰者乃是已登正覺之大聖也論レ本旣與二眞如一冥一談レ迹卽與二萬品一同量德冠二衆聖之表一道絕二有心之境一事以二無爲一爲レ事相以無相一爲相但大悲無レ息志存二益物一形同二世俗居士一と申された。

七

維摩經を註釋した者は古來甚だ多い。先づ羅什三藏が翻譯して後、羅什自から此の經の註釋を施し、その筆授者の僧肇も別に註釋し、羅什門下の道生も註釋した。現今は此三註を寄せ集めて本經に合糅して、註維摩經と名付けて居るが、太子の頃には別本でありたに違ひない。而して太子は肇註を見られたことは、疏中處々に引用されてある處で知られるが、羅什や道生の註は出て居ない處

から察するに、見られなかつたものと思はれる。羅什の註釋以來、諸大家の此の經を註釋したもの頗る多く、總てを數へ上げたならば數十百部に及ぶであらう。諸宗章疏錄に出た處だけでも末疏二十九部列ねてある。今は煩はしいので一々名は擧げぬが、古來の諸註釋中その代表として見るべきものは通佛敎としては前の註維摩經、及び淨影寺の慧遠の疏八卷を初めとして、天台宗の代表としては智顗の玄疏六卷、廣疏二十八卷、荊溪の略疏十卷、廣疏の記六卷、三論宗の代表としては嘉祥の疏五卷、遊意一卷、玄論八卷、禪宗の代表としては、傳燈の無我疏十二卷、華嚴宗としては、本朝凝然の上宮太子義疏の菴羅記四十卷（現存三十卷）に見る外はない。これ等は舊譯の經に就いたものであるが若し新譯の無垢稱經に就かば、法相宗の代表の釋として慈恩の說無垢稱經疏（無垢稱讚）六卷である。併しこれ等は何れも自己の宗旨眼を以て釋して居るので、諸宗共通のものではない。純然たる不偏不黨の註釋は我が日本に於て初めて佛經を註釋された上宮太子の義疏三卷である。東太寺戒檀院凝然大德の菴羅記は更に此の太子の疏を最も詳密に註解し盡されて餘蘊はない。眞に珍重すべきであるが、唯惜しむらくは問疾品の愛見の悲を離るゝことを說く經を釋した太子疏下卷の文を註する第三十卷に至りて、其後の疏記十卷を缺いて居る。

他の末疏はさて措き、今の太子の義疏の成り立ちを窺ふに、三經義疏中法華經疏は光宅寺法雲の法華經義疏の說を本義として釋せられてあるが、今此の維摩經義疏は何人の義を主として釋せられ

たかといふに、此の疏は必ずしも誰を主と定められたといふことはない。多くは太子の自說と窺はれる。他說を出す時は肇法師云とか、肇法師解言とか、中公解言とか、法空法師解釋などゝ名を出さるゝ處もあり、又名を出さずして或解言とか、有一云とか、釋者曰とか、或云とか、又一解言とか、舊義とか、新義とか言ふてある處もありて、肇公などの說には取る處もあるが、その多くは太子の取られぬ說である。夫れに對して自說を出さるゝ時は、多くは但私懷者として書かれてある、時偶には私釋などの語もある。自說の外に本義として出された處は一ケ所もない。されば此經の疏釋は法華經義疏とは違ふて法說を批判し、自ら取られる處は全く太子評量の自義で、一定の依據があるとは見へぬ。僅に一ケ所今但據二一家所習一者といふてある處もあるが、これは菴羅記二に諸蕃法師所解深義及冥感聖者所授深奧義總以二此等一名爲二一家一と釋してありて、當時百濟新羅等より渡來せし諸師の襲用せられ居る義といふ意であらう。惟ふに太子在世の當時百濟新羅震旦等より高僧法匠多く來朝せられた。彼の元興寺の九僧正といはるゝ慧慈、慧聰、慧師、慧觀、觀勒などは皆渡來の法師でありて、何れも盛んに法義を談じたものでありた。太子は是等の人に隨ふてその宗義を聽かれたものであらう。それ等の法匠は皆三論宗系に屬する碩學であるから、それ等の法匠所用の義を一家所習と言はれたものと思はれる。敢て一師の本義の說といふのではない（菴羅記七、同二十八參照）。

諸師の註疏及び太子の疏に因んで講解のことを一言せば、羅什が本經を釋して以來、庶民百官の間にも此の經の講筵は開かれたであらうが、皇帝のために、此維摩經を進講したといふことは、支那に在ては譯成りて七十餘年の後、齊の高帝建元元年に帝は莊嚴寺に行幸せられて、僧達法師の維摩經を講ずるを聽かれたのが初めである(統記三十六)。我日本にありては傳には判然せぬが、太子が三經疏を作られてその中他の二經を詔を受けて講せられた以上、此の經も必ず講せられたことと思はれる。爾來維摩の講經は斷續して居たが、齊明天皇三年、藤原鎌足公山城國宇治郡山階陶原薗に在りて重病を得た時、百濟尼法明の勸めによりて、公の家に維摩の像を安じ、維摩經を讀み、彼尼をして講せしめた。是れが維摩會の初めである。斯く維摩の像を安置したり。尼の講經したことは、支那では羅什渡來以前よりあることで、統記三十六に東晉哀帝興寧元年の條に、瓦官寺の惠力が維摩の像を壁畫したことを記し、それより三年後太和二年の條に支遁が嘗て此經を講じたこと出で、その翌年尼道馨が維摩經を衆のために演說したことが出て居る。本朝では齊明天皇三年以來、十二年間年々維摩會が勸まり、第二年は福亮僧正が講師でありた。その後天智帝八年十月に鎌足公薨去後斷絕した(諸寺緣起集及多武緣起)。慶雲三年亦之を復興して、智鳳が講師を勸め、和銅二年淨達法師之を勸め、同五年興福寺に移して之を勸めた。斯やうに明滅はありたが、遠く隔りて延曆二十年に興福寺に更に復興した(元享釋書)。爾來年々續いたものであるが、中に就て壽永二年には

範雅が勤め、元曆元年には圓長が勤め、文治二年には笠置の貞慶が勤められた。

八

此より本文に就て、太子の見解を窺はうと思ふ。けれども全部を出す餘裕もないので、今は全部に通ずる處の分科だけを掲げることゝせう。夫れに就ては、その分科せらるゝ處の本文の說相を一往知り置く必要があるので、此に先づ略して本文十四品の綱領を列ねて見やう。

(一)佛國品、佛が毘耶離國の菴羅樹園で說法して在す時、長者の子寶積が五百長者の子と共に來て、多くの寶蓋を供養したれば、佛はそれを一の寶蓋として、其中に佛國土及び說法の相を現じて見せられた。そこで寶積は偈を以て佛德を嘆じ、且つその國土の淨き理由、菩薩淨土の行を問ひ、佛は菩薩の心が淸淨なれば、佛土も淸淨ぞと答へられ、此の時圖らず舍利弗と螺髻梵王とが現在居る所は淨土か穢土かの問答が始まり、佛は足指按地で決論を與へられた。

(二)方便品、夫れと同時に一方には維摩が病を現じて自が家に閉ぢ籠りて居たので、國王大臣長者居士婆羅門などの多くの人が見舞に往き、それ等の人に對して此の身の無常なることを說法した。

(三)弟子品、佛は維摩の病を知しめして、舍利弗等の五百の弟子に問疾せよと命せられたが、何れも曾て維摩に彈訶されたことを述べて辭謝した。

(四)菩薩品、佛は彌勒等の菩薩に問疾を命ぜられたが、やはり昔日の難詰を述べ恐懼を懷いて辭謝した。

(五)問疾品、佛は更に文殊に問疾を命ぜられ、文殊は佛勅に從ひ、幾多の菩薩や聲聞に圍繞されて、それを率ひて問疾し、無窮の智辯を振ふて居士と應對した。

(六)不思議品、舍利弗が維摩の方丈の空室にして床座なきを心に怪んで居るのを居士が悟りて、東方須彌燈王佛の國より八萬四千由旬の高座三萬二千を借り入れたが、少しも狹隘を感ぜぬので、舍利弗がそれを怪問し、居士は不可思議解脫に住するものは、須彌を芥子にも納れ、大海を毛孔にも容れ得ると答へた。

(七)觀衆生品、文殊の問によりて居士は衆生の身は水中の月、鏡中の像、幻化の人等の如しと答へ、室中天女がありて華を降らし舍利弗の衣に着て離れぬので、舍利弗は天女のために執着ありと辱められ、更に問に應じて天女は法には男女の別はないと敎へた。

(八)佛道品、維摩と文殊の間に問答して、菩薩は世間に住して非道を行じつゝ、其處に佛道に通達することは譬へば卑濕の淤泥中に蓮華の生ずるが如しといひ、更に普現色身菩薩の問に應じて、維摩は智慧方便慈悲道品等は、これ我が父母妻子眷屬僮僕奴婢等であると、佛法は我が精神上の家族である旨を偈を以て答へた。

(九)入不二法門品、維摩は入不二法門の理を諸菩薩に問ひ、三十一菩薩は何れも自己の見解を述べ、第三十二番目に文殊は默にある旨を述べ、最後に維摩は之を默し去りた。

(十)香積佛品、舍利弗が食時の至れるを心に思ひ、維摩はそれを悟りて、上方の香積佛の衆香國から香飯を請ひ、會中の大衆に飽かしめた。その時俱に來た衆香國の菩薩と維摩との間に度生に就ての問答がある。

(十一)菩薩行品、維摩は文殊と共に大衆及び衆香國の菩薩を引率して、菴羅國の佛所に來た。佛は阿難に對して聞香のみならず、光明、菩薩。所化、菩提樹等諸有百法がみな佛事をなすが、諸佛法門であることを說かれ、佛は衆香世界の菩薩のためにも盡無盡法門を說法され、菩薩は喜んで本國に還歸した。

(十二)見阿閦佛品、維摩は佛身の無相なることを述べ、佛は舍利弗に對しは、維摩は無動佛の妙喜世界より來れることを說き、大衆をしてその本國を見せしめられ、而して佛の問に對して舍利弗等は善利を得たことを歡んで此の經聞持の利益を述べた。

(十三)法供養品、帝釋は佛に向ひて、此經受持の功德の廣大なることを述べ、佛は寶焰如來の本事を引て供養の勝るゝことを說かれた。

(十四)囑累品、佛は彌勒阿難に此經を未來に流通せよと附囑せられ、大衆は歡喜奉行した。

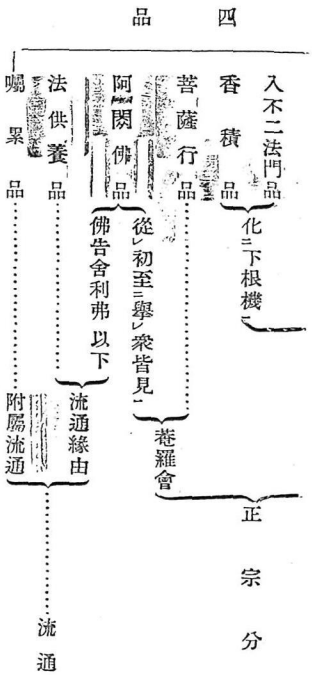
以上略して經の大旨を列擧したが、此の經の大體を知るには、分科に就て見るに若くはない。その分科の大なるものは三分の分科であるが、是れに就ても異說あり、又會所の見やうでも大體は知れるが是れにも異說がある。先づ三分の異說といふのは、梁の三大法師の中、開善寺智藏は四分として、初四品は序分、室內六品は正宗分、菩薩行、阿閦の二品は證誠分、法供養以下流通分と見た。此說は天台略疏一三右に出てゐる。又莊嚴寺慧旻と光宅寺法雲は三分とし、序正は同前で、後の四品を流通分と見た。此の說は嘉祥疏一四左遊意三十二右に出て居る。又北地の諸師は初一品は序、中の十一品は正宗後の二品を流通と見た。是れも天台略疏三右に出てゐる。而して天台の自說と嘉祥の自說とは、初品の偈の終る迄は序分、寶積の發問以下は正宗分、囑累の一品を流通分と見た。慈恩は新譯に就て、說經因緣分、正陳本宗分、讚授流通分と分けたが、經の分け方は北地の諸師と同じことである。又會所に就ては、淨影寺慧遠は義記一三右に三會と見て第一菴羅會＝佛說、第二維摩室會＝維摩說、第三菴羅重會＝佛維摩說とした。遊意三十二右には之を十地論師の說といふてゐる。又嘉祥疏一三右遊意三十三右及び玄論第七第八には華嚴の七處八會に准じて見れば、二所四會あるべしとて、左の如く記した。今は圖として揭げて見やう。

二處〈菴園二會〈初會—佛國品四衆八部集佛說淨土法門、并命弟子菩薩問淨名之疾〉
重會—菩薩行品文殊淨名等至佛所〉

方丈二會
- 初會—方便品淨名現レ疾長者等皆往問レ疾淨名因レ疾說レ法
- 後會—問疾品文殊與二聲聞菩薩一入二方丈一問レ疾

嘉祥は此の一處四會の前後を更に遊意三十三左には二種に分別していふやうは一に時事次第、卽ち事實上、時節の前後から見れば方丈に淨名が現疾して居て佛處に來なかつたから菴園で佛が聲聞や菩薩に問疾を命ぜられ文殊等が方丈へ問疾して後一同が菴園へ來たから方丈菴園方丈菴園の次第であり、又二に集法前後、卽ち翻譯の時、經文に記さるゝ時は初に菴園に佛が說法せられある時會衆に對して淨名現疾の方丈へ問疾を命ぜられた。而しで後の二は前と同じい。そこで菴園方丈方丈菴園の次第となるといふて居る（菴羅記二十五）。これ等の說は何れも一長一短で當る點もあり、當らぬ點もある。最も當を得たのは太子の所見で其義は問疾品の初の釋に出て居る左に圖示して見やう。

- 十佛國品（從レ初至二諸來大衆一……通序）
- 本經
  - 方便品（爾時毘耶離以下……原起序）
  - 弟子品……
  - 菩薩品……
  - 問疾品（化二上根機一）
  - 不思議品（化二中根機一）
  - 觀衆生品
  - 佛道品
  - 別序（述德序）
  - 顯德序
  - 序分
  - 方丈會
  - 三分



太子は此の外にも他の説を二説出されてあるが、然今據二前釋一而述也と自説を取られた太子は此の如く、一經を三分二會と見られて開善の四分説のやうに餘剩らしい證我分もなく、嘉祥の四會説の如き鎖煩もなく、三分とし二會として最も明確である。今之れが一々の説明は略するとして此の三分科は何れから由來して居るかといふに、太子の科は前に出した莊嚴や光宅の説に大に似同して居る處から見ればそれを聊か訂正し分科せられたものと思はれる。光宅の三分科は天台略疏には晩三論師亦同二此釋一といひ、嘉祥の疏の頭書には興皇の朗師の所用と見て居る。然れば三論家の分科であらう。太子が當時聽かれた諸師は三論系の人々であるから三論家に承用する三分科を取りて聊か修飾されたものに違ひない。處が嘉祥の疏一四右には此光宅説に對して大に三の過失を擧げた。一には光宅等は前四品は室外のことで序説とする意であらうが方便品は淨名が長者等の問疾者のために

說法して居るので室外でなく室內であるゆへ、序ではなくして正宗分とせねばならぬ。二には方便品等の四品の如きは大小凡聖に對しての病を破し淨土の法門を明してあるので、序分と見るは無理であり、又法供養品の如きも盡無盡の法門を明してあるので流通とは見られぬ。三には室の內外で序正を分つのは唯事に就たので義が隱れて了ふ、義を取らずして文を分てば文までが曲りて了ふ。よりて義に從ふて文を分けねばならぬといひ、同一二十五丁には太子の取られた原起序等の三序を出してこれは傍らの序で正き序でないから用られぬと言つた。此の破は直接太子の分科を破したのではないが、此の破斥がやはり太子の分科にテツキリ當るので、一往辯解を試みねばならぬ。更に又嘉祥は是の故に寶積の說偈までは序分、寶積の問より法供養品終る迄は正宗。後一品が流通であるといひ、而して肇公にはもとより分科はないがかう科するが肇公の意に叶ふて居る。卽ち肇公は註維摩一五右に始自二于淨土一終二于法供養一其中所レ明雖レ殊然其不思議解脫一也といふて初め佛國品から法供養品までが正宗なることを暗示して居るといふた。天台も此の肇公の語を取りてそれ〻同じ三分說を立てゝ居る。依りて今嘉祥の難破を辯疏し、彼等の三分の必ずしも然らざる事を示さう。先づ嘉祥の非難に、序にも流通にも法門は出せぬといふのは偏執である。何れの經でも序分にも流通にも法門の出て居ることは多々ありて一々證明する迄もない。而も此經は正しく維摩の說法を明すが經の本旨である。そこで維摩の說法を正說とする時初めの佛國品の如き佛が菴羅に在して說法して居ら

るゝといふ迄が正宗分であるべき筈はない。その佛說法の會座へいつも來る維摩が來て居ない。それは次品に說く如き現病の故であると知らせんための說相で、それが正說の由て來る源であるから原起序（嘉祥疏一二十五右には緣起序）である。又方便品は維摩が自證の不思議解脫の法門を說かんとて方便して病を現じて居らるゝ慈悲の德を述ぶる處であるから述德序であつて維摩の正說でないのは明かである。又弟子菩薩の二品は聲聞や菩薩が佛より問疾の命を受けても維摩の威德に恐れて辭謝して居る處であるから、顯德序であつて、正宗でないのは明了である。又阿閦品の終りは此の經聞持の利益及び佛滅後の衆生の聞經修行の利益を說いてあり、法供養品には帝釋天が此經を信受し讀誦し修行する者を守ること及び月蓋の因緣を引て信受讀誦し分別解說し守護するが法供養であると說て居る。これが何で維摩の正說であらう。流通分なること文に在りて明了である。又天台、嘉祥は肇公の語を引て初四品皆正宗分と言て居るが、肇公も註維摩經二初右方便品の初に此一品全序「其德」也といひ、羅什も此品序「淨名德」とも、將「序「其德」とも言て居る。されば羅什肇公は方便品を序と見る意とも見られる一文に執じてはならぬ。尤も羅什や肇公が明かに序正を分けたのではないから、何れにしても確證ではない。猶嘉祥は直接太子を破したのではないが、太子依用の古說を破した處は處々にある。一例を出さば嘉祥疏三三十二左に文殊の問疾の時維摩が文殊の問には答へながら佛よりの傳問には答へざるに就て佛問「至「佛所」方「答といふ南澗の說を擧げて嘉祥は破して居るが、その南

澗の說は太子採用の說である。之れが通釋は菴羅記二十七にも出て居る。斯んなことは往々あるが今は一々述べぬ。

九

太子の維摩經義疏三卷の中、太子が最も意を注ぎ、力を振はれた處は何れにあるかを私に窺て見るに、恐くは經の佛國品の淨土の因として直心、深心、菩提心、布施、持戒等の十七事を明せる處と思はれる。卽ちその中の第一に直心是菩薩淨土菩薩成佛時不諂、衆生未二生其國一とあるを太子は釋せられて、菩薩因位の時直心を修して衆生にも直心を修することを敎へられる。然るに菩薩所修の直心は無相でありて佛果を感じ、衆生所修は有相でありて淨土を感ずる〻されば所感の淨土に取りては衆住の直心が正しき因であるが、菩薩の緣を因と取り傚して菩薩の直心が淨土の因といふたもの。又不諂衆生等とは、菩薩が衆生に直心を敎へ不諂ならしめて、その衆生所感の淨土に往生せしむるのであるが、敎化の本に約して菩薩の淨土に生るゝ樣に說たものと釋し。次の第二深心以下十六事も同例であるといひ、而も此の十七事に就て太子は委しく十番の問答を設けて釋せられ、又その十番問答の中には重ねて細かい幾多の問答もありて極めて詳密に釋してある。之れ太子の最も力を振はれた處である。今之を一々述ぶる遑もないから菴羅記九によりて十番問答の名を列ぬれば左の

通りである。

第一遠縁爲因章＝亦名衆生正因章

第二共位感土章　（記には此章の名を缺く今私に名けた）

第三淨土因行章

第四勸生淨土章

第五淨土無退章

第六上淨無退章

第七上業滅惡章

第八報盡生淨章

第九淨土三界章

第十不離直心章

菴羅記には此の十番を釋し了て、凝然自ら重ねて七番の問答を以て自が意見を述べてゐる。今太子の十番問答を見るに直心不諂等の因によりて淨土に往生する事を述べ、而して其の往生人の位次、因行より淨土の體相、淨土の無退墮等すべて淨土の因果を詳釋し、最後に不離直心を以て結んでありて、歸する處直心等の勝因によりて勝れた淨土に生るゝ事を述べたものである。淨土往生の因果を

斯くも詳述されたのはこの淨土往生といふことが太子の信仰でありたと窺はれる。尤もその淨土往生といふのも凝然も釋して居らるゝ通り他力淨土門の淨土ではない、隨其心淨卽ち佛土淨の直心所感の淨土ではあるが、それがすぐに阿彌陀佛の淨土であつて、兜卒などの淨土ではない、これが彌陀の淨土であるといふ事は、此十本問答中に無量壽經の唯除逆謗の文を引いたり、又上品下品の淨業より上品下品の淨土に生るゝことを出すなどは觀經から來る處と思はれる。これ等の釋相から見ても彌陀の淨土なる事が推知される、されば太子は內には深く唯心己心の彌陀の淨土に往生するとの信仰を懷きつゝ外には維摩に習ふて世に處し、以て一國を善導しようとせられたものと仰がれる。

十

太子が維摩經を疏釋なされたのは維摩居士に私淑し、居士を以て自任せられたと推測し奉るに就ては、經中に於て居士の何れの邊に着眼されたかを窺ふて見ねばならぬ、今私に惟ふに一經全體皆然りではあるが、特に此處ぞと思はるゝは方便品と佛道品の二品である。これが宛かも勝鬘經を註釋せられた處には三大願と十大願が太子の理想であつたと思はるゝと同じく、此の二品が此の經に於ける太子の理想であらう。先づ方便品の初めには維摩居士の日常の云爲行動を歎じて、所有の資財を以て貧民を救ひ、禁戒を奉じ、恚怒を忍び、懈らず淨行を勵み、白衣でありながら沙門の行爲を

執り、家に住在して居ても執着せず、妻子眷屬は有りても清淨の行を忘れず、衣食を恣にしながら佛法海に身を浴して法味を嘗め、博戯や四衢に遊んでも濟度を心がけ、異道世典を學んでも信佛を傷けず、治生諧偶に於ても耽溺せず、講論學堂に入る時は大乘法に導き、婬舍酒肆に入りても欲の過失を示し、長者居士刹利婆羅門等の中に入りても、何れにも尊ばれて正道を敎へ、王子大臣內官宮女庶民の間に處するにも、何れもその間の尊長となりて、忠孝正法を敎ふる等と說てある。これ維摩の行動にして、太子は之れに私淑されたものであらう。又佛道品には、文殊の問に答ふる維摩の言として、非道を行じつゝある儘に佛道に通達するが菩薩であるといひ、その非道の儘の佛道とは在家生活の儘に佛道を行ずることで、日々無間業を作りながら功德を積み、慳貪邪見に住しながら如來の慈忍を行じ、愚痴瞋毒に絡りながら大悲心を起して衆生を敎化し、憍慢懈怠の身の儘に世の橋梁となりて人を樂しましむるにあるなどゝいひ、これ等が菩薩の行ひであることを詳說して居る。居士の不可思議解脫とは此等をいふのであらう、必しも座を燈王に借り飯を香上に請ふなどのことには限るまい。更に維摩の問に對して文殊は夫れを嘆美していかにも世間を捨て出家して自分だけ證らんとする二乘の輩の如きは淸らかな高尙な生活のやうでも、迚も大菩提心を發して世を濟ふ事は能きぬ。よりて彼等は佛法の正意ではない。高原の陸地には蓮華は咲かぬ、卑濕な泥中にこそ蓮華は咲く。又空中に種を植えても芽は生えぬ、糞壤の地にこそ能く根莖は繁茂する。佛道の根芽や

菩提の蓮華は擇滅無爲に憧るゝ二乘などの清淨地には現出せぬ。凡夫煩惱の泥海深く沈んでこそ無價の寶珠たる菩提の果實を得るのであると合ひ槌を打つた。太子は是れ等の談合に深く共鳴され、厚く維摩居士を敬慕されたるより此義疏を製したまひ、維摩に習うて在俗のまゝ凡夫地に在りて、身躬から佛道の本旨を體して、一般世間を開導しようとせられたものであらう。これが後世からも和國の敎主と仰がれたまひし所以である。